

現職教員は養成段階での経験についてどのように捉えているのか —— 実態調査から見た教員養成における学生教育の指針とは ——

舩田 弘子¹川原 茂雄²二通 諭³

要 旨

本研究は、教員養成における学生教育の指針を得るため、教員に影響を与えた体験や、重視されているスキル等を、現職教員への調査を通じて把握することを目的として行われた。研究協力者は研究会等に参加した現職教員93名であり、教員を志したきっかけや教員として学生時代に経験・獲得しておくべきことなどを質問紙によって尋ねた。その結果、(1)教員になったきっかけは多様であったが、自分が経験した教員・教育の影響や児童・生徒と関わりを持った体験が多くを占めた。(2)基本的にはどのような行動も「経験・獲得をしておくべき」とされた。中でも、授業につながる具体的な学習経験と、様々な立場の人たちとの交流経験が重視されていた。(3)(2)の自由記述では、「様々な経験をする」や、「社会的スキルを身につける」、「学ぶ」などが多く記述された。また、「生活面でのスキルや自立」、「精神・身体面のセルフケア」など、自立や自己管理についても挙げられた。これらから、教員養成課程における教育への指針として、(1)実際に児童・生徒と関わる体験をさせること、(2)今までの教育や教師の経験を積極的に利用すること、(3)多様な経験や学習を奨励することなどが挙げられる。

キーワード：教員養成，教員を志したきっかけ，学生時代に経験・獲得すべきこと，教育における指針，現職教員

1. 問題と目的

教員を養成する課程では、教師としてふさわしい能力や知識を学習者に獲得させることが求められることは言うまでもない。これに関して文部科学省は、「いつの時代でも求められる教師の資質」として、「教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養、そしてこれらを基盤とした実践的指導力といった能力がいつの時代にも教員に求められる資質能力である」とまとめている（文部科学省、1999）。また、北海道教育委員会による教員育成指標（平成29年12月）では、「求める教員像」として、(1)教育者として、強い使命感・倫理観と、子どもへの深い教育的愛情を、常にもち続け

る教員（使命感や責任感・倫理観、教育的愛情、総合的人間力、教職に対する強い情熱・人権意識、主体的に学び続ける姿勢）、(2)教育の専門家として、実践的指導力や専門性の向上に、主体的に取り組む教員（子ども理解力、教科等や教職に関する専門的知識・技能、授業力・生徒指導・進路指導力・学級経営力などの実践的指導力、新たな教育課題への対応力）、(3)学校づくりを担う一員として、地域等とも連携・協働しながら、課題解決に取り組む教員（学校づくりを担う一因としての自覚と協調性、コミュニケーション能力、組織的・協同的な課題対応・解決能力、地域等との連携・協働力、人材育成に貢献する力）が挙げられている。さらに、これらについての養成段階、初任段階、中堅段階、ベテラン段階における求められる水準が示されている（北海道教育委員会、2017）。

児童・生徒の健全な育成に携わる教員にとって、このような多様な資質能力、スキルを必要とすることは、

¹ 札幌学院大学 人文学部；masuda@sgu.ac.jp.

² 札幌学院大学 人文学部；kawahara@sgu.ac.jp.

³ 札幌学院大学 人文学部；nitsusat@sgu.ac.jp.

当然のことであると考えられる。しかしこれらには、大学における授業だけでは達成が難しいものもある。例えば、文部科学省における「教育的愛情」、北海道教育委員会の育成指標における「総合的人間力」や、「子ども理解力」などは、学生個々の大学入学以前および入学後のさまざまな経験にも依存するものであろう。

これに関連し、舩田・工藤（2009）および、新國・舩田（2015）は、大学入学後のボランティア活動を通じて学生自身が何を獲得したと考えているのかについて、調査に基づく分析を行っている。

舩田・工藤（2009）では、ボランティア活動として大学地域連携活動である『SGU 遊ベンチャー』を取り上げた。これは、札幌学院大学において、教育活動や心理学に関心が高い学生を対象に、従来不足していた「体験型学習」の機会、具体的には、地域の子どもたちとの交流体験を重ねる場を提供するものとして構想された活動であり、2005年度から現在に至るまで継続されている。この活動は、学生が中心となって計画立案・広報・実践・評価を行うことを基本としており、一つの社会的活動を実現する過程に一貫して学生が主導的に関わるため、貴重な教育的経験となることが期待された。参加学生37名に調査を行った結果、「子どもと実際に交流する」など、子どもとの関わりに関する内容や、「多様な学部・学科・学年の学生と交流する」、「子どもと交流するスキルを得る」など、学生同士の交流とものづくり、子どもとの関わりに関する内容において満足度が高く、活動が一定の効果をあげていることが分かった。

また、新國・舩田（2015）では、学内の障害学生支援ボランティア団体である『バリアフリー委員会（BFC：Barrier Free Committee）』を取り上げた。BFCは、1999年度に聴覚障がい学生が札幌学院大学に入学したことをきっかけとして、当該学生の情報保障（テイク活動）から始まったもので、教職員と学生によって創設されたものである（現在は本学の常設委員会として『アクセシビリティ推進委員会』と改称）。その活動内容は、情報保障に関わる活動（聴覚障がい学生が履修する授業のテイク活動、テイカー養成など）、学生生活支援の活動（車椅子学生の登下校や学内移動の介助など）、相談に関わる活動（障がい学生の支援ニーズの把握と支援方法の相談など）他、多岐にわたる。参加学生32名に、前掲した舩田・工藤（2009）による調査の改訂版による調査を実施した結果、「会

議等での意見の調整や集約の能力を得る」、「学生同士の交流のスキルを得る」、「多様な学生と交流する」、「障がいを持つ人について理解する、知識を得る」など、主にコミュニケーションを通じた調整能力などが身についたと答える学生が多かった。

これらの研究を踏まえると、学生が課外活動に従事することは、学生の意図を超えて、様々なスキルや能力を涵養するのに有効であると考えられる。一方で、これらの研究には、測定の対象が学生の意識にとどまっているという問題点がある。学生が自らの成長を実感するのはもちろん大切なことだが、実際それが社会に出てからどのように活用されるのか、あるいは思ったほどは活用されないのではないかという予測や効果の究明までには至らない。すなわち、学生であるがゆえに、自らの経験がその後どう役立つのかについてより広い視野からとらえることは困難であると考えられる。

そこで本研究では、大学を卒業し、実際に教職に従事している現職教員を対象に、「自分の教職経験を踏まえて、大学時代になにを経験しておくべきか」を尋ねることとした。これらを通じて、講義以外の体験として教員に影響を与えている体験や、重視されているスキルなどを把握したい。これらをまとめることで、豊かな人間性を持った教員を養成するためには、学生にどのような経験をしよう方向づけたり指導したりすべきかについて、指針となるような情報を得たいと考える。

2. 方法

2.1 質問紙の構成（付録1）

質問紙は以下のような項目で構成された。

- (1) **個人属性を測定する項目** 研究協力者を大まかに分類するため、以下の項目について選択肢式で尋ねた。なお、研究参加者に配慮し、「答えたくない」という選択肢も用意した。「年齢（選択肢：20歳代・30歳代・40歳代・50歳代以上・答えたくない）」、「性別（選択肢：男性・女性・答えたくない）」、「現在所属の学校種（選択肢：小学校・中学校・高等学校・特別支援学校・答えたくない）」
- (2) **教員を志すきっかけを測定する項目** この項目群は、川原（未発表）を改定して用いた。教示は、「あなたが教員を志すきっかけになったのはどういことですか？ 以下の枠内から当てはまるも

のをいくつでも選んで、a~iの記号を○で囲んでください。j(その他)を選んだ場合は、その内容を【 】に簡単にお書きください。」とし、「小学校の時の優れた教員の影響から」、「家族などのすすめから」、「自分の好きな部活動を指導したいから」、などの10個の選択肢を提示し、回答を求めた。

(3) 教員から見た大学時代に必要な経験およびスキル

この項目群は、舩田・工藤(2009)を参考に、教員養成の観点から考えられるものを付加したものをういた。教示は「あなたが教員を志す後輩達に向けて、『大学時代に、これは経験しておく／身につけておくべきだ』とアドバイスするとしたら、どのようなことについてアドバイスしますか?それぞれの項目について、当てはまると思うところに○をつけてください。」とし、「授業を見学すること」、「指導案の書き方を習得すること」、「パソコンなどのIT機器やソフトウェアの使用法を習得すること」、「異なる立場や年齢層の人たちと交流すること」などの18個の選択肢を提示して、4件法(ぜひ経験・獲得を~教員としては不要)の評定値による回答を求めた。

2.2 研究協力者

研究協力者は北海道内で現在教職についている93名。大学等で主催する研究集会への参加者に調査への協力を依頼した。

3. 結果と考察

3.1 研究協力者の属性

研究協力者(以下 Research Cooperators, RCs)の性別は男性62名(66.7%)、女性31名(33.7%)であった。年齢は、20歳代が16名(17.2%)、30歳代が12名(12.9%)、40歳代が27名(29.0%)、50歳代以上が37名(39.8%)、無回答が1名だった。現在所属の学校種は、小学校が34名(34.6%)、中学校が6名(6.5%)、高等学校が20名(21.5%)、特別支援学校が32名(34.4%)、無回答が1名だった。

性・年齢・学校種でクロス集計をした結果、小学校では50代以上男性(8名)と、40代女性(7名)が多い傾向、高校では50代以上男性(9名)が圧倒的に多く、特別支援学校では50代以上男性(9名)および50代以上女性と20代男性(それぞれ6名)が多い傾向が認められた。

表1 教員を志すきっかけ・選択肢への回答

選択肢	回答数(%)
a 小学校の時の優れた教員の影響から	24 (25.8)
b 中学校の時の優れた教員の影響から	19 (20.4)
c 高校の時の優れた教員の影響から	13 (13.9)
d 家族などのすすめから	11 (11.8)
e テレビ・漫画・小説などの影響から	5 (5.3)
f 今まで経験した教育・教師への不満から	12 (12.9)
g 公務員で経済的に安定しているから	6 (6.4)
h 自分の好きな教科/科目を教えたいから	18 (19.3)
i 自分の好きな部活動を指導したいから	12 (12.9)
j その他	46 (49.4)
計	166

3.2 教員を志すきっかけ(表1, 表2)

これについては、全166回答が寄せられた。ひとりあたり1つ以上の回答があったことになり、多様なきっかけがありうることが改めて分かった。

圧倒的に多いのは、「a~c 優れた教員の影響」である。小学校、中学校、高等学校、および大学での教員の影響を指摘する回答が、合計で50件以上に及んだ。RCsが教員という進路を選択するうえでモデルとなる優れた教員像を持っていることがうかがえる。一方で、「f 教育への不満」も12件挙げられている。これはいわゆる「反面教師」としてのあり方が影響を与えているとも言える。また、「h, i 好きな教科・好きな部活動を指導したい」というきっかけも、合計で30件と比較的多くのRCsによって記述された。

自由記述に目を転じると、「ボランティア・アルバイトなどでの経験」、「教育実習」など、学習者となるような児童・生徒とかかわりを持った体験が合わせて12件(26.1%)を占める。これらは、舩田・工藤(2009)や新國・舩田(2015)にみるように、大学生が成長するきっかけとして重要な体験であると捉えられる。教員においても、これらの活動は、その直接的な目的(例えば、教育実習であれば、教員の仕事を体験的に学ぶこと)を超えて、個人の意識の変容に一定の効果を持ちうる可能性があることが示唆された。

なお、現役の学生たちがどのように考えているかについては、(一社)全国私立大学教職課程協会編(2018)の実態調査の報告書が参考になる。この報告書では、2016年11月~2017年2月に、全国7432人の教職課程を

表2 教員を志すきっかけ・「j その他」の分類

カテゴリー名	具体例	件数 (%)
教育による子どもや社会への貢献	・教育により社会貢献したいと思ったから ・障害児（福祉）に携わりたく、しかも教育の仕事をしたかった。 ・子供の成長・感化に寄与したかったから	8 (8.6)
「教員」という仕事の特殊性	・経済活動とは関係のない文化的な仕事をしたかった ・男女差がなく、結婚・出産してからも働ける仕事だと思った。 ・就職難で、公務員（教員）は自分の実力でつかむことができるから。	8 (8.6)
家族・親戚の影響	・教員をしていた父の教育観に近付きたいと思い、教員を目指した。 ・親戚などに教員をしている人が多く、その影響。	7 (7.5)
ボランティア・アルバイト等での教育経験	・高校でやっていたボランティア活動・ジュニアリーダー活動 ・中学生時の友人にわからないことを教えて理解してもらえた経験から。	7 (7.5)
教育実習	・教育実習で、学校には、自分を成長させる（変える？）何かがあると感じた ・教育実習に行った時の生徒たちからの言葉。	5 (5.3)
学校や人と関わるのが好き	・子供と触れ合いたいから。 ・学校が好きだった。高校時代が楽しかったから。	4 (4.3)
高校卒業以降の他者との経験	・大学での学びの経験。 ・高校卒業後の人との出会いで。	3 (3.2)
メディアで感動	・学生時代「バラサン岬に吼えろ（両角憲二）」を読んで感動したから。 ・山田洋二の映画「学校」を見て。	2 (2.1)
その他	・何の影響かはわからないが、幼いころから漠然と教職に就きたいと考えていたので ・まず資格が欲しいと思ったことがきっかけ。	2 (2.1)
計		46

履修している大学3～4年生に調査を行い、その結果をまとめている。それによれば、教職課程を履修した理由として、「子どもとかかわる仕事がしたいから」の評定平均値が最も高い（5件法で全国平均4.31）。続いて、「教師にあこがれていたから（同3.90）」、「幼・小・中・高の先生の影響を受けて（同3.85）」となっている。低い方では、「中・高の職場体験で学校に行ったから（同1.72）」、「親に教職を取るように言われたから（同1.95）」、「ただ何となく（同2.01）」となっている。

3.3 教員として「大学時代に経験しておく／身につけておくべきこと」

A～Qの各項目について、各評定値（1：ぜひ経験・獲得を～4：教員としては不要）にかんして「あてはまる」としたRCsが50%以上と多い項目も併せて検討した（表3）。全体を通じて、基本的にはどのような行動も「できれば経験・獲得を」としていることがわかる。

項目ごとに見ると、「A 授業を見学すること（62.4%）」、「B 教科・分野に関連した資料（書籍・ビデオなど）を読む／見ること（54.8%）」は、「ぜひ経験・獲得を（評定値1）」への回答が多かった。また、

「G 英語等の外国語での会話に習熟すること（58.1%）」、「N 障がいを持つ人たちについて理解する、または知識を得ること（51.6%）」、「P 異なる文化や社会などの背景をもつ人（子ども）たちと交流すること」・「O 障がいを持つ人たちと交流すること」（いずれも50.5%）は、「できれば経験・獲得を（評定値2）」への回答が多かった。これらのことより、求められる経験・獲得すべきこととして、授業につながる具体的な経験をし、学ぶことと、様々な人との交流をすることなどが挙げられているといえる。

逆に、「H 書類づくり、文章作成等の事務処理能力を得ること（51.6%）」は、「教員になってからで十分（評定値3）」への回答が多かった。また、フォーマットの決まった書類などの書き方はあまり重視されていないといえる。

さらに、自由記述も56件（60.2%）あった（表4）。

まず、「1 様々な経験をする事」について書かれたものが最も多かった（25件）。これには、多様な経験をする事と、一つのことで深く経験することの重要性が含まれる。

「多様な経験」の記述の具体例としては、次のようなものが挙げられる。なお、カッコ内は性別、年齢段階、

学校種別をそれぞれ示す。

・「楽しいと思うこと、人に話したいと思うことをたくさん経験したら良いかなと思います。(男性・20代・特別支援学校)」

・「一緒に「働く」(アルバイト)など、肉体労働、夜の世界(グレーゾーン含む)…大きく異なる社会、世界、世間を広く学ぶこと大切。／一次産業の経験とかできないんですかね? 3-5年地方の農家手伝って教授受けると受かりやすいとか…win-winの政策あると面白いと思います。(男性・40代・特別支援学校)」

・「視野を広げることは、とても大切かと思いません。学内でいえば、同じゼミ・学科の人だけでなく、多くの人とかかわることが、必ず教員になってから(ならなかったとしても)その経験が生きるはずです。(男性・40代・中学校)」

また、「一つのことを深く経験すること」の記述の具体例としては、次のようなものがあった。

・「サークル活動でも研究でも、一つのことを深くやりこむ経験(男性・40代・小学校)」

・「自分の趣味に没頭すること。教室で子供たちに接するときの話題やクラブの指導に役立つと思います。(女性・40代・小学校)」

これらの記述からは、それら多様なあるいは深い経験が、授業等の具体的な業務内で役に立つということとはもとより、人間としての幅を広げるためにも役立つと考えられていることが伺える。また、そのような経験をしていることが、「5 社会状況等への関心や理解(4件)」、「7 考える力(4件)」、「10 自分の意見を持つ(4件)」などを支える力になっていくことも考えられるのではないだろうか。

次に多かったのは、「2 社会的スキルを身につける」である(21件)。一般に社会的スキルとは、「社会の中で自立し主体的であるとともに、他の人との協調を保って生きるために必要とされる、生活上の能力。(デジタル大辞泉)」である。これについては、他者とかかわるためのコミュニケーション能力に関することと、礼儀などの側面が挙げられていた。

コミュニケーションに関わる記述の具体例としては、次のようなものが挙げられる。

・「人と関わること、様々な方々とコミュニケーションをとること。(女性・40代・小学校)」

・「困った時人に相談できること。相談できる相

手を見つけることで、悩みなど解消されていくのかなと思います。(女性・40代・特別支援学校)」

また、礼儀に関わる記述の具体例としては、次のようなものが挙げられる。

・「あいさつ、礼儀作法、言葉づかいを身につける。(女性・40代・特別支援学校)」

・「服装や言葉遣いに関するマナー。(男性・30代・小学校)」

教員は、児童・生徒をはじめ、同僚(先輩・後輩)教員や保護者、地域社会の人々等と円滑な関係を保つ必要がある。特に、問題を抱えた児童・生徒に関わる際には、保護者・専門家を含む複数の関係者と連携を図り、調整を行いながら問題の解決に当たる必要がある。これらに関わって、社会的スキルが大変重要であることが、記述から改めて認識させられる。

続いて、学ぶことに関する内容があった。「3 勉強する(13件)」、「4 謙虚に他者から学ぶ姿勢(6件)」、「9 自分の専門についての知識やスキル(3件)」などがそれにあたる。

「勉強する」では、読書をすること、資格の学習などをすることなど、単独で行う学習に加え、研究会や勉強会に参加するなど、他者とかかわりながら学ぶことも挙げられていた。例としては、

・「社会科学・基礎教養・教育学・子どもの発達などをテーマにした本を読んでほしい。(男性・40代・小学校)」

・「職業学科(商業・情報等)の免許を取得予定であれば、簿記や情報等の資格に挑戦することで、自分の苦労が一生につながっていくので、是非受験して、自分が資格取得し、それを生徒に還元できれば、取得する・させるとどちらにも喜びを得ることができると思います。(男性・30代・高等学校)」

・「学校で行われている研究授業・研究大会に参加すること。(女性・20代・小学校)」などがあつた。

・「謙虚に他者から学ぶ姿勢」では、同僚や先輩教員はもとより、児童・生徒からも学ぶ気持ちを持ち続けることについて言及されていた。例としては、

・「目の前のお子さんのことについて、さまざまな角度から理解すること。その子を理解しようとする意識を持ち続けるべき。(女性・50代・特別支

表3 「大学時代に経験／獲得しておくべきこと」への回答パターン（数値は人数・カッコ内%）

	ぜひ 経験・獲得を	出来れば 経験・獲得を	教員になって からで十分	教員としては 不要
A 授業を見学すること	58 (62.4)	27 (29.0)	8 (8.6)	0
B 教科・分野に関連した資料（書籍・ビデオなど）を読む／見ること	51 (54.8)	34 (36.6)	8 (8.6)	0
C 指導案の書き方を習得すること	22 (23.7)	26 (28.0)	41 (44.1)	4 (4.3)
D 授業・模擬授業を実施すること	43 (46.2)	30 (32.3)	20 (21.5)	0
E 大学での学習から得た知識を授業等に積極的に活かすこと	25 (26.9)	37 (39.8)	28 (30.1)	2 (2.2)
F パソコンなどのIT 機器やソフトウェアの使用法を習得すること	23 (24.7)	46 (49.5)	24 (25.8)	0
G 英語等の外国語での会話に習熟すること	8 (8.6)	47 (50.5)	23 (24.7)	12 (12.9)
H 書類づくり，文章作成等の事務処理能力を得ること	6 (6.5)	33 (35.5)	48 (51.6)	5 (5.4)
I 会議で建設的な発言をしたり，多様な意見の調整・集約の能力を得ること	17 (18.3)	37 (39.8)	34 (36.6)	3 (3.2)
J 困っている人（子ども）の相談に乗ったり，支援したりする方法を知ること	33 (35.5)	46 (49.5)	14 (15.1)	0
K 行事やイベント等の企画・運営の経験を持つこと	21 (22.6)	53 (57.0)	17 (18.3)	1 (1.1)
L 異なる立場や年齢層の人たちと交流すること	45 (48.4)	45 (48.4)	3 (3.2)	0
M 多様な大学・学部・学科・学年の学生たちと交流すること	32 (34.4)	54 (58.1)	7 (7.5)	0
N 障がいを持つ人たちについて理解する，または知識を得ること	44 (47.3)	48 (51.6)	1 (1.1)	0
O 障がいを持つ人たちと交流すること	44 (47.3)	47 (50.5)	1 (1.1)	1 (1.1)
P 異なる文化や社会などの背景をもつ人（子ども）たちと交流すること	34 (36.6)	47 (50.5)	11 (11.8)	1 (1.1)
Q 海外に旅行したり留学したりすること	17 (18.3)	36 (38.7)	26 (28.0)	13 (14.0)

援学校)」

・「わからないことは聞く，そして謙虚に実践しようとする気持ち。（女性・20代・小学校）」などである。

・「自分の専門についての知識やスキル」では，大学で学べる知識やスキルの中で，教員として役に立つ（たった）ものが挙げられていると思われる。例として，

・「授業の基礎はがっちり身に付けておいていいと思います。（女性・20代・小学校）」

・「WISC-Ⅲなどの検査について。（男性・50代・高等学校）」

があった。

これらからは，学ぶことについての多様なアドバイスが浮かび上がってくる。自分一人でじっくり取り組むべき学習もあるし，他者の優れた実践や考え方に学ぶ学習もあり，目の前の児童・生徒とかかわる中での学習もある。更に，それらの学習が，個人の知識や経験を豊かにするだけではなく，児童・生徒とのかかわりに還元できるという考え方も示されている。そして，そのような学習を受け入れる基盤としての，素直に学べる姿勢が指摘されているとも考えられる。

さらに，決して多くはないが，教師としての生活のマネジメントに関わる，「6 生活面でのスキルや自

表4 「大学時代に経験／獲得しておくべきこと」・その他(S)の分類

カテゴリー名	下位カテゴリー／例	件数
1 様々な経験をする	・多様な経験, 社会経験 (アルバイトなど), 異なる社会や人を知る 14 ・夢中になるものを見つける, 楽しいことをたくさん知る, 趣味に没頭 4 ・サークル, 部活動の経験 2 ・旅行 2	25
2 社会的スキルを身につける	・伝える力, 聞き取る力, 対話 7 ・わからないことを聞く, 困った時に助けてもらう 4 ・読みやすい字・丁寧な字 3	21
3 勉強する	・読書 (専門書, 論文, その他) 5 ・研究授業・研究会に参加する 2 ・全国で活躍している優れた授業をする先生がたに会うこと 1	13
4 謙虚に他者から学ぶ姿勢	・生徒を理解しようとする姿勢 2 ・生徒から学ぼうとする気持ち 1 ・長幼の序, 年長者の話を謙虚に聞く姿勢, 1	6
5 社会状況等への関心や理解	・海外の学校事情の理解 1 ・世の中の動きに対する興味・関心 1	4
6 生活面でのスキルや自立	・生活に必要なスキル 1 ・社会的な生活力 1	4
7 考える力	・本当にそうか?と立ち止まって考えること 1 ・正しいことは何かを考える目を養うこと 1	4
8 精神・身体面のセルフケア	・体力をつける 1 ・時には力を抜いて取り組む技術 1	4
9 自分の専門についての知識やスキル	・授業の基礎 1 ・自分の得意分野を持つ 1	3
10 自分の意見を持つ	・自分の意見を持つこと 1 ・自分の考えを持つこと (指導法, 授業計画など, 相談する前に自分の考えを示すこと.) 1	3
11 チャレンジと失敗	・チャレンジする力 1 ・失敗すること 1	3
12 その他	・後悔しない生き方? 1 ・教育の大切さの見直し 1	3

※数字は件数

立(4件)], 「8 精神・身体面のセルフケア(4件)」も挙げられていた。例としては、

・「自炊能力, 衣食住等の自立。(男性・40代・特別支援学校)」

・「きちんとした生活, 自立。(男性・50代・小学校)」

・「精神的な強さを身につける経験。(男性・50代・高等学校)」

・「ストレス解消法をできるだけ多く見つけること。(男性・20代・特別支援学校)」

などがあった。

ここからは、教師の仕事の忙しさ、厳しさなどが垣間見える。特に、都市部ではなく地方の小さな自治体の学校であれば、便利な店舗や施設・設備なども少なく、また教師であるがゆえに、生活が衆人環視の下に置かれることになることも容易に想像できる。仮にそ

のような場合であっても、個人としての生活を立て、気持ちを切り替えながら仕事ができる必要があるというのと解釈できよう。

4. 討論

4.1 結果のまとめ

本研究の目的は、現職教員への質問紙調査を通じて、教員に影響を与えている体験や、教員によって重視されているスキルなどを把握することであった。調査からは、以下のようなことが明らかになったと考えられる。

(1) 教員になったきっかけはたいへん多様であったが、自分が経験した教員および教育の、正・負両面における影響が多かった。また、ボランティアや教育実習など、児童・生徒とかがかりを持った体験も多くを占めた。

(2) 教員として、大学時代に経験しておく／身につけておくべきことについて、質問項目への回答では、基本的にはどのような行動も「できれば経験・獲得を」とされていた。なかでも、授業見学や教材資料を学ぶなど、授業につながる具体的な経験をしつつ学ぶことと、様々な立場の人や子どもたちとの交流をすることなどが重視されていた。逆に、書類などの書き方、会議での行動、外国留学・外国語学習などはあまり重視されていなかった。

(3) (2) の自由記述では、「様々な経験をすること」や、「社会的スキルを身につけること」、「学ぶこと」などが多く記述されていた。「様々な経験をすること」は、「社会状況等への関心や理解」、「考える力」、「自分の意見を持つ」などの基盤となることが想定され、重要であると考えられる。また、「6生活面でのスキルや自立」、「精神・身体面のセルフケア」など、人間としての自立や自己管理についても挙げられていた。

4.2 学生指導上の指針

これらの結果からは、教員にとって必要な様々な資質や能力が浮き彫りとなってくる。ここから、大学の教員養成課程で、特に学生に体験させるべき・学ばせるべき内容とは何かについて考えてみたい。

第一に、実際に児童・生徒と関わる体験をさせることの重要性が挙げられる。すなわち、教育実習に行く前から、学生に積極的に学校でのボランティアやインターンシップを促したり、授業を見学させたりすることなどである。これは、今日の教員養成における考え方も推奨されている。例えば、平成27年7月16日付で発表されている、文部科学省・教員養成部会の中間まとめである「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」(文部科学省, 2015) では、「(1) 学校インターンシップの導入 (p.28)」として、「教職課程の学生に、学校現場において教育活動や校務、部活動などに関する支援や補助業務を行わせる学校インターンシップや学校ボランティアなどの取組が定着しつつある。これらの取組は、学生が長期間にわたり継続的に学校現場等で体験的な活動を行うことで、学校現場をより深く知ることができ、既存の教育実習と相まって、理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成に有効である。また、学生がこれからの教員に求められる資質を理解し、自らの教員としての適格性を把握するための機会としても有意義であると考え

る。(p.28)」としている。本学においても、札幌市や北海道教育委員会と提携した学校ボランティアの機会を学生に提供してきている。このような機会を利用することや、また本学の個々の教員が実践しているように、学生を近隣の学校に連れていき見学させることなども有効であると考えられる。

第二に、受けた教育や教師の影響が強いことから、それらの経験を積極的に利用することが挙げられる。例えば、大学に来るまでの教育経験を回想させ、大学生あるいは教員を志すものとして、それら過去の教員について客観視して属性記述するなどの試みがあっていいだろう。つまり、ただ「恩師、好きな先生、良かった教育／反面教師、教育への不満」というだけではなく、その教員あるいは教育のどのような点が、自分に肯定的あるいは否定的な影響および印象を与えたかなどについて、考察する試みである。学生には、単に過去の経験を理想化あるいは嫌悪するのではなく、分析的に理解し、そこから学ぶべき点を考えさせたい。このような「省察」を経ることによって、学生自ら目指すべき教員のモデルをより明確にしていく可能性が高まる。さらに、現場教員としての経験のある大学教員が、自身の授業経験や印象的な学校での体験、教師としての理想を語ることも、間接的な手法とはいえ有効である可能性もある。

第三に、多様な経験や学習を奨励することが挙げられる。実際、教員として児童生徒の前に立つとき、教員は自分の持つ資源を最大限活用しながら活動することが求められる。この資源を増やすためには、やはり多様な経験を積むことや、一見関係のないような領域を広く学習したり、一つのことに打ち込んで深くやりきったり学習したりすることが必要であると考えられる。このような活動をとおして、様々な他者とかわることができ、他者の立場を理解・配慮する共感性や、コミュニケーション能力が育っていく可能性があるのではないだろうか。したがって大学は、学生に様々な経験の機会を可能な限り提供していくことが望ましいだろう。例えば本学では、教員を目指す学生同士の交流会や、大学OBの現役教員と交流する機会(「SGU教師教育連絡協議会」)、また講演会などを積極的に開催して、機会の提供に努めている。このような活動を継続していくことは今後とも重要であると考えられる。

4.3 今後の課題

4.3.1 研究課題について

今回の調査では、データ収集上の限界から、研究協力者の年齢、学校種などに偏りが生じた。また、担当教科についての情報も得おくべきであった。このような偏りおよび情報の欠損のために、クロス集計などあまり行えず、よりきめ細かい分析ができなかったことが問題点であると言える。

その一方で、当初予想していなかったほどたくさんの自由記述が得られたことは大きな収穫であった。これをもとに、今後は質問紙の内容を改定し、さらなる情報の収集に努めたい。

4.3.2 教育上の課題

上記4.2において、学生指導上の指針として3点を挙げた。すなわち、「(1) 実際に児童・生徒と関わる体験をさせること」、「(2) 受けた教育や教師の経験を積極的に利用すること」、「(3) 多様な経験や学習を奨励すること」である。以下、これらについて、課題となることを挙げる。

まず「(1) 実際に児童・生徒と関わる体験をさせること」についてである。前述のように、本学でも学生にそのような機会を提供しているが、近年、それら継続的なボランティア活動への参加率が下落傾向にある。この理由については明らかではないが、学生が自ら貴重な機会を逸しているのであれば大変残念なことである。これについては、学生の状況を把握し、学生がより利用しやすく、取り組んでみたいと思わせるような機会の提供に努める必要があるだろう。

続いて「(2) 受けた教育や教師の経験を積極的に利用すること」については、どのような方法で学生に客観視させることができるかについて、工夫の必要などころであろう。感情的な体験と強く結び付いていることを冷静に分析するのは認知的な負担を伴うことであり、そこからすると、学生が独力でこれらの活動を行うことは困難であるかもしれない。このような場合は、授業を活用する必要があるだろう。例えばブレインストーミングの技法等を用いて、お互い意見を出し合い感想を述べ合うなどの活動を、授業に取り入れることができるのではないかと。

最後に、「(3) 多様な経験や学習を奨励すること」であるが、学生はともすると自分の関心にのみ集中し、その他のことに関心を払わない傾向がある。したがっ

て、関心の喚起にも工夫が要る。心理学の知見では、「自我関与」が高い場合、つまり当該の事項が自身と密接にかかわると感じた場合に、そのことに対する意欲や行動が促進されるとされている。これを応用するならば、教員が当該の事項と教職との間との関係性を説明し、二つの間に「橋を架ける」活動をするなどの取り組みが必要であると考えられる。

これらの課題に順次取り組みつつ、教員養成段階の望ましい教育の在り方について、今後とも考察を深めていきたい。

謝辞

快くデータ収集にご協力くださった教員の皆様に、心より感謝申し上げます。

本研究は、北海道私立大学教職課程研究協会研究助成金（平成29年度）を受けて行われた。

参考文献

- [1] 北海道教育委員会 教育庁 教職員課 (2017). 報告書 北海道における教員育成指標, <http://www.dokyo.jp/pref.hokkaido.lg.jp/hk/ksi/ikuseishihyou.pdf> (2019年2月20日閲覧)。
- [2] 一般社団法人 全国私立大学教職課程協会研究委員会 教職課程カリキュラム部会編 (2018). 「教育実習及び現場体験活動に関する実態調査」結果報告書, 一般社団法人 全国私立大学教職課程協会, 東京。
- [3] 舛田弘子・工藤与志文 (2009). 大学における「体験型学習」の有効性に関する教育心理学的研究 —子どもを対象とした大学地域連携活動 (SGU 遊ベンチャー) を対象に一, 札幌学院大学人文学会紀要, 85, 103-122.
- [4] 文部科学省 教育職員養成審議会 (1999). 養成と採用・研修との連携の円滑化について (第3次答申) 2 教員に求められる資質能力について, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_shokuin_index/toushin/1315385.htm (2019年2月20日閲覧)。
- [5] 文部科学省 中央教育審議会 (2015). これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い, 高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～ (答申) (中教審第184号), http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf (2019年2月20日閲覧)。
- [6] 新國三千代・舛田弘子 (2015). バリアフリー委員会の実践にみる障害学生支援の取り組みの成果と課題 (3) —バリアフリー委員会 (BFC) の学生に対するアンケート調査 (2010年度実施) をもとに一, 札幌学院大学人文学会紀要, 97, 1-23.

付録1 調査に用いた質問紙

3. あなたが教員を志す後輩達に向けて、「大学時代に、これは経験しておくべきだ」とアドバイスするとしたら、どのようなことについてアドバイスしますか？ それぞれの項目について、当てはまると思うところに○をつけてください。

経験・獲得を	経験・獲得を得る	教員として不要
A 授業を見学すること		
B 教科・分野に関連した資料（書籍・ビデオなど）を読む／見ること		
C 指導案の書き方を習得すること		
D 授業・模擬授業を実施すること		
E 大学での学習から得た知識を授業等に積極的に活かすこと		
F パソコンなどのIT機器やソフトウェアの使用法を習得すること		
G 英語等の外国語での会話に習熟すること		
H 書類づくり、文章作成等の事務処理能力を得ること		
I 会議で建設的な発言をしたり、多様な意見の調整・集約の能力を得ること		
J 困っている人（子ども）の相談に乗ったり、支援したりする方法を知ること		
K 行事やイベント等の企画・運営の経験を持つこと		
L 異なる立場や年齢層の人たちと交流すること		
M 多様な大学・学部・学科・学年の学生たちと交流すること		
N 障がいを持つ人たちについて理解する、または知識を得ること		
O 障がいを持つ人たちと交流すること		
P 異なる文化や社会などの背景をもつ人（子ども）たちと交流すること		
Q 海外に旅行したり留学したりすること		
S 上記以外で、これをぜひ経験・身につけるべきだと感じる事がありましたら、以下の空欄に簡単に本書きください。		

ご協力ありがとうございました。附属のペンはどうぞお持ち帰りください。

「教員の仕事」についての意識調査

この調査は、札幌学院大学・教職課程の教育活動に活かすため、現職教員の皆様から情報を得ることを目的としています。回答は、研究以外の目的で使用することはありません。また、個人情報も適切に扱い、研究結果の公表については、個人が特定されないよう充分注意することを約束いたします。どうぞご協力よろしくお願いたします。

札幌学院大学人文学部 舩田弘子・川原茂雄・二通諭

1. あなたご自身について伺います。【 】内の最も当てはまるところを1つ選び、○で囲んでください。
 ○年齢：【 20歳代・30歳代・40歳代・50歳代以上・答えたくない 】
 ○性別：【 男性・女性・答えたくない 】
 ○現在所属の学校種：【 小学校・中学校・高等学校・特別支援学校・答えたくない 】

2. あなたが教員を志すきっかけになったのはどういうことですか？
 以下の枠内から当てはまるものをいくつでも選んで、a~jの記号を○で囲んでください。
 j（その他）を選んだ場合は、その内容を【 】に簡単に本書きください。

a 小学校の時の優れた教員の影響から	b 中学校の時の優れた教員の影響から
c 高校の時の優れた教員の影響から	d 家族などのすすめから
f 今まで経験した教育・教師への不満から	g 公務員で経済的に安定しているから
h 自分の好きな教科/科目を教えたいから	i 自分の好きな部活動を指導したいから
j その他	

【
]

裏にも質問があります。

How Incumbent Teachers Apprehend Their Past Experiences in Their Teachers' Training Period?

— Understanding the Guiding Principle Educating the Students in the Teachers' Training Course by Carrying Out a Questionnaire —

Hiroko MASUDA,¹ Shigeo KAWAHARA² and Satoshi NITSU³

Abstract

This study aims to get the guiding principle how we educate the students in the teachers' training course by carrying out a questionnaire to the incumbent teachers about their experience which affected them to choose teaching as their job and about the skill they regard important as teachers. The research participants were 93 incumbent teachers who attended some kinds of the workshop, and were asked to answer the questionnaire on the trigger of becoming teachers and the experiences needed as students to be a teacher. The results were as follows; (1) Though the triggers to be teacher were widely ranged, above all, the influence from the teachers and education they experienced, and from the experience they contacted with students had high ratio, (2) Basically speaking, every activity was regarded desirable to experience during university period. Most of all, the concrete learning experiences which were related to the teaching activity and communicating with the various kinds of people were apprehended as highly important, and (3) Among the comments on (2), "experiencing various kinds of things", "acquiring social skills" and "learning" were majorly described. Moreover, both being independent and self-controlling were pointed out, like "the skill for living and being independent" and "self-caring of mental and physical health". Based on these results, the guiding principle could include following points; (1) Facilitating students to communicate with pupils, junior-high, and senior-high students, (2) Utilizing students' knowledge and experiences on the past education and teachers, and (3) Encouraging students' various experiences and studying.

Keywords: Teachers' Training, The Triggers to be Teacher, The Experiences Needed as Students to be a Teacher, The Guiding Principle for Teachers' Training, Incumbent Teachers.

¹Department of Human Sciences, Sapporo Gakuin University; masuda@sgu.ac.jp.

²Department of Human Sciences, Sapporo Gakuin University; kawahara@sgu.ac.jp.

³Department of Human Sciences, Sapporo Gakuin University; nitsusat@sgu.ac.jp.

